

# 2024 年度事業計画書

(2024 年 7 月 1 日～2025 年 6 月 30 日)

## 財団事業(定款第4条)

1. 高齢者の医療・福祉に関する調査・研究・研究助成及びその成果を活用したプログラム等の開発・提供並びに人材育成
2. 地域医療・福祉の事業モデルの啓発及び地域医療・福祉に貢献する団体・個人の表彰
3. その他当法人の目的を達成するために必要な事業

### 【運営方針】

1. 地域共生社会実現のため、地域包括ケアシステムの構築に貢献する。
2. 医療・看護・介護並びに福祉の現場の方々の意見を財団事業に活かすとともに、啓発事業などの情報提供を通じて現場の方々を支援する。
3. 地域共生社会において、医療・看護・介護並びに福祉を担う人材の育成に貢献する。

上記財団事業、運営方針を踏まえ、研究開発・啓発・人材育成の各事業を連携させながら事業に取り組む。

## 1. 研究開発

### (1). 統合ケアマネジメント事例検討会

2014年9月から、「国立社会保障・人口問題研究所」などとの共催で開始しました本事例検討会は、2017年度より、当財団主催で開催しています。2024年度も、医療・看護・介護に関わる各専門職が、地域性や人間関係にとらわれることなく積極的な発言ができることを会の基本方針として、3ヶ月に1回の頻度でZoomによるオンラインにて開催します。

さまざまな課題を抱えた利用者の事例を取り上げ、他の専門職の「見立て」や対策検討の思考過程を共有することにより、答えを探すことを目的とするのではなく、新たな“気付き”を得ることを目的とし、検討会を運営していきます。検討した事例については個人が特定できないように内容を編集した上で事例の内容を取りまとめ、誰でも閲覧できるようホームページ上に公開し、ケアマネジメントの向上に繋げていく予定です。

### (2). 認知症のある人との心理的対等性実現のための XR 技術を活用した PX 体験学習システムの開発と実証評価研究

本研究はケア専門職の人材不足や高度な教育環境を背景として、実践力育成を加速させることを目的に実施しています。2023年度は、ケア専門職の実践スキル向上のため

に、XR 技術を活用した学習システムの構築と予備的検討を進めました。XR 技術の特長を活かして、現実では体験することのできない患者視点の体験 (PX: Patient eXperience) が可能な空間コンテンツを開発し、特にケアプロフェッショナルにおいて共感性の向上が示される等のスキル習得に有効な結果が得られました。一方で、専門職の実践力育成のためには、コンテンツを充実化させ、より実質的な現実の体験を空間内に構築していく必要があることが明らかとなりました。また、PX 体験における学習状況が体験者によって異なる様子が観測され、学習状況をより客観的に評価するための検討も必要となります。さらに、一般市民向けには認知症へのスティグマを増加させる可能性があることが示唆され、体験方法の工夫に関する課題が多く得られました。

このような 2023 年度で得られた多くの課題を踏まえて、2024 年度は、三つの観点からそれぞれ以下のように研究を進めていきます。図1に開発する PX 体験空間の概要を示します。

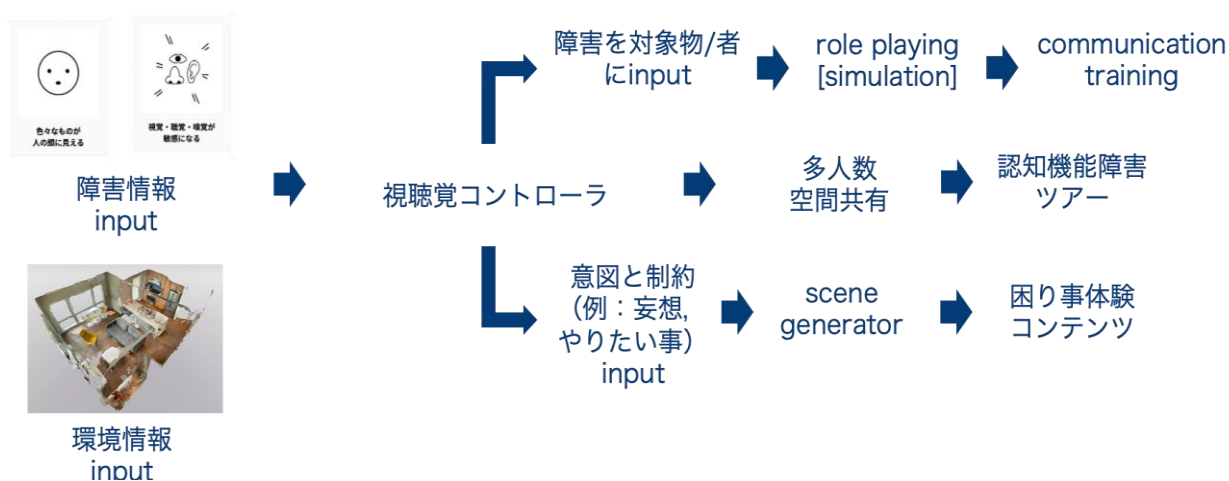


図1. 研究開発の概要

## 1). PX 体験学習システムの構築 (メタバース、360° 没入型映像)

特に、メタバースを活用した PX 体験空間のデザインと実践的評価に関する研究を中心に進めます。メタバースは設計の幅が広く、どんなファクターが実践力に結びつくのかを整理する必要があります。今年度は体験空間のコンテンツの拡充を進めるとともに (コンテンツ拡充の機能は概ね実装済みだが障害の内容によっては新たな開発が必要となる)、体験空間の設計者として認知症当事者と連携しながら空間を構築する Co-production を実践していく予定です。また、新たな機能として、同じ空間で体験する内容を人によって変えてコミュニケーショントレーニングができるような場へ拡張させていくことを予定しています。これらの機能実装によって、専門職の実践力にどのように貢献するのかを実証評価していきます。

## 2). 学習効果の評価

メタバース体験時の活動は身体の動きが多いためノイズが多くなることから、主に360° 没入型映像を活用して学習状況の検証を行います。主観的な評価は総括的な評価になる場合が多く、生体情報を活用して形成的な評価をすることで、没入感を評価し、それがどのように総括的な評価やアウトカムにつながったのかを評価します。EDA や心拍のデータが評価用データとして検討している主なセンサになりますが(図2)、表情等の情報もセンシングして活用することを検討していきます。

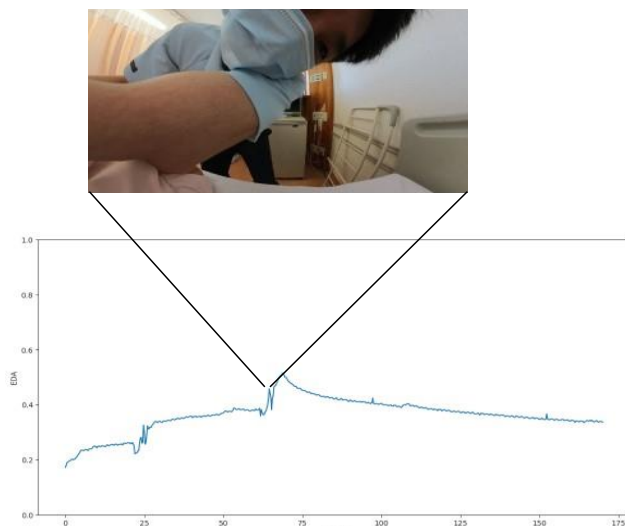


図2. EDAの変動と映像のシーンの関係の分析

### 3).体験方法と学習効果の関係の整理

単にPX体験のみをすると、実践とは異なる文脈になり、特に新人の専門職に対する効果が確認できなかったことから、シナリオの作成や施設の対象者をより明確にイメージできるようにPX体験の内容を専門職と一緒に検討していきます。また、一般市民向けのコンテンツとして、スティグマを増幅させないための方法があるのか、もしくは、その限界を明らかにしたいと考えています。PX体験者の属性とXR技術によって得られるアウトカムを整理し、最終的には今後の研修における効果的なフレームワークを提案します。

今年度はこれまでの研究成果として、国際会議(もしくは、ジャーナル)での発表2件、学会等での口頭発表3件を予定しています。

#### 【XR】

XRとは「Cross Reality(クロスリアリティ)/Extended Reality(エクステンディドリアリティ)」の略称で、一般的には現実の物理空間と仮想空間を組み合わせる技術の総称。XRには、VR(仮想現実)、AR(拡張現実)、MR(複合現実)、SR(代替現実)の4種類を含む。

## 【PX】

PX(Patient Experience ペイシェント・エクスペリエンス)は、患者中心の医療を実現するためにイギリスで生まれた考え方で、日本語では「患者経験価値」と訳される。PXは、「患者が医療サービスを受ける中で経験するすべての事象」と言われる。

### (3). 社会的処方事例検討会(通称“アボカドの会”)への後援

2022年度から、社会的処方研究の一環として、財団が事務局となり、三重県名張市と「みえ社会的処方研究所」中心に、原則月1回社会的処方事例検討会(“アボカドの会”と呼称)を開催してきた。

本事例検討会は、2023年度、当財団が一部事務局機能を受託したモデル事業(厚生労働省保険局「かかりつけ医と専門医、保険者の協働による予防健康づくり事業」)で、事業の終了後も継続して開催することとなった。これまで関わってきた経緯や財団発足以来、「統合ケアマネジメント事例検討会」を通じて事例検討会の有用性を認識していることから、2024年度の“アボカドの会”を通じ、社会的処方の取り組みが、県内各地に広がることを期待してこの事例検討会を後援することとする。

### (4). 2024年度「コンパッションに満ちたまち」検討事業

#### 1). 目的

我が国における地域共生社会の実現に向け、共感と協働の基盤となりうる概念として、「Compassionate Communities\*」に焦点を当て、これを手がかりに国内外の活動や事象に検討を加え、日本での展開可能性を探索することを目的とする検討事業を継続します(2021-2022年度の計画を2年間延長)。

#### 2). 概要

堀田聡子氏(慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科)、島菌洋介氏(大阪大学グローバルイニシアティブ機構)を世話人として研究会及び作業部会を継続、国内外におけるCompassionate Communitiesの展開について調査研究を行い、フィールドワークと当事者の語りの蓄積、ワークショップやツールの設計等を実施する予定です。

#### 3). 2024年度の研究内容

##### (a).研究会・作業部会の開催

国内外におけるCompassionate Communitiesの展開に関連する報告に基づき、医療介護福祉・地域づくりの実践者及び研究者等からなるメンバーで対話を重ね、地域共生の観点からの示唆をとりまとめることを目指します。

##### (b).フィールドワークと当事者の語りの蓄積・分析

b-1 新型コロナウイルス感染症×ケアを手がかりにした取り組みの分析を継続します。

- ・グループ内の事業所におけるクラスター発生、他事業所及び他法人への応援職員派遣等を経験した宮城県内の医療福祉グループBにおいて2022年度に実施した役職員による経験の振り返りにかかわるテキストデータの分析・意見交換

- ・2020年4月にクラスター発生を経験した富山県内の老人保健施設Cにおいて継続的に実施した職員インタビューのデータの分析・意見交換
- ・滋賀県内の特別養護老人ホームAを含めた分析のアウトプットの検討
- b-2 国内外の Compassionate Communities の展開について調査研究を行います。
  - ・国内外の事例収集及び現地調査(都内各所・札幌・イギリス・ドイツ・カナダ(調整中))
  - ・国内でのアクションリサーチ(宮崎県都農町・長野県軽井沢町)
  - ・文献調査
  - ・以上に基づく分析・意見交換

(c).成果の発信

- ・b-1 で共有された経験と語りの編集
- ・b-2 の海外調査報告
- ・論文投稿(2025年度)

【\*Compassionate Communities について】

パブリックヘルスと緩和ケアにかかわる潮流が融合して Allan Kellehear 教授らにより提唱されたもので、次のような中心的概念からなるものです(“Compassionate cities: Public Health and End-of-Life care” , Routledge, 2005)。

- ・Compassion(cum(together) + patio(suffering))は健康への倫理的要請である。
- ・疾病・障害・喪失があってもなお、健康とはポジティブな概念である。
- ・Compassion は全人的／生態学的なアイデアである。
- ・Compassion は喪失の普遍性と関連する。

「死にゆくこと(dying)」「死(death)」「喪失(loss)」の普遍性に焦点をあて、コミュニティのあらゆる場で「生老病死を地域住民の手に取り戻す」アクションサイクルにつなげる実践が生まれており、Public Health Palliative Care International が、そのネットワークとナレッジ共有のプラットフォームとなっています。

## 2. 啓発

### (1). 看護・介護エピソードコンテストの実施

超高齢化が進む中、高齢単身世帯の増加や核家族化などの社会的背景もあり、特に高齢者に対する看護・介護のさまざまな問題が増えてきています。こうした中で、実際に看護・介護に携わる方々には、やりがい・喜びなど感動する場面が多くあります。当財団では、看護・介護に関わる方々のエピソードを通じて、その体験を広く社会に発信していきます。

地域共生社会の実現、地域包括ケアシステムの構築には、地域住民や多職種間の相互理解、そして、将来的な人材の確保が不可欠です。看護・介護に携わる方々の体験を世間に広く伝えることで、その理解や人材確保に少しでも貢献できれば幸いです。

実例報告、エッセイなど形式を問わず、看護・介護に関わる幅広い方々の応募を期待しています。

選考は、①財団事務局で1次選考(応募された作品が応募要項に合致するかなど)を行い、②医師、訪問看護師、編集者・ライターの3名の選考委員からなる選考委員会において、大賞1編、優秀賞3編、選考委員特別賞5編を選考し、事務局により理事長賞25編を選考します。選考に際しては、作品ごとに評価項目を点数化した上で協議し、厳正に行います。看護・介護エピソードコンテストの結果は広報誌、ホームページで受賞者、受賞作品、受賞者の言葉などを公表します。

なお、看護・介護エピソードコンテストの広報にあたっては、広報誌、ホームページや関係者へのメール、介護施設等へのリーフレットの配布、マス媒体、コンテスト雑誌、親密学会等へアプローチをしていく予定です。

- ・募集期間 2024年12月～2025年4月(予定)
- ・分量・書式 400字以上2400字以内、A4横書
- ・テーマ 「伝えたい！わたしの看護・介護エピソード」
- ・賞 大賞:1編30万円、優秀賞:3編各10万円  
選考委員特別賞:5編各5万円、理事長賞:25編各3万円

## (2). 広報誌発行

当財団の事業・研究活動を通じて明らかになった諸成果や、全国各地での地域共生社会の実現や地域包括ケアシステムに関わるさまざまな情報を、年2回(2月・8月)広報誌“オレンジクロス”により広く社会に発信します。今年度は、第17号、第18号の発行を予定しています。配布先は、財団関係者(医療・看護・介護関係者、学者・研究者、行政関係者など)を中心に約600人の方々に配布の予定です。

## (3). シンポジウム・セミナーの開催

当財団の事業目的に関するテーマを取り上げ、広く社会に発信するシンポジウム・セミナーを開催します。

### 1). 「コンパッションに満ちたまち」検討事業シンポジウム

ア. 日時

2024年秋に開催予定

イ. 演題

「コンパッションに満ちたまち」を実現するために(仮題)

ウ. 運営方法

会場とWEBによるハイブリッド開催の予定。

### 2). 仕事と介護を両立するためのシンポジウム

ア. 日時

2024年11月開催予定

イ. 演題

働きながら介護に向き合うービジネスケアラー(仮題)

ウ. 運営方法

当日は会場開催。後日アーカイブを配信予定。

エ. 共催

公益財団法人ダイヤ高齢社会研究財団との共催シンポジウム

#### (4). シンポジウム・セミナーの動画配信と資料等の公表

当財団ホームページにシンポジウム・セミナーの動画配信や講演資料等を公開して、シンポジウム・セミナーの内容を広く社会に発信していく予定です。

以上